

石の山

見あげるばかり高く切り立つた山だ。御影石の山々だ。山の肩のあたりから、刃物でそいだやうに突つ立つてゐて、真晝の日光が、まぶしいほど反射して来る。

あちらの山でも、こちらの山でも、三四人づつ一かたまりになつて、石の上で働いてゐる。鑿を持つ人、それを槌で打つ人、その穴に水をさす人。

堅い石に、長い鑿を打ち込んで行くこの仕事は、生やさしいものではない。真直に打ち込むのだ。第一、並み並みならぬ根氣がいる。

槌の音は、いかにものんびりと響いてゐるが、一槌ごとに心をこめて打つてゐる音である。一センチ、二センチ、石に穴があく。それが積み積つて、五メートル、八メートルにもなるのである。

日の出から日の入りまで、同じやうな仕事を、くり返しくり返し續けてやる。たとへ日が照らうが、風が吹かうが、じりじりと震けられて行く。

初等科國語七 第六學年前期用 (第三分冊) 【第二分冊第十六回一山の生活】ニツバタ

十分深い穴を掘つてしまふと、火藥を固くつめる。爆音とともに、家ほどもある御影石が、ごろんごろんと、倒れ落ちる。その大きな石を二つに割り、四つに割り、用途によつては更にいくつにも小さく割つて行く。

堅い、大きな石が、小さな鑿と槌で、思ひ通りにばくんばくんと割れる。

割られた石材は、石積み車に載せられて、山の道をすべるやうに運ばれて行く。

日がな一日、露天で働く石工たちは、みんな日にやけて、顔も、腕も、黒々としてゐる。いかにも丈夫さうだ。けれども、仕事の相手は大きな岩であり、山のからだである。それで、石工の姿は、山の中で見かけると至つて小さく、たよりなく見える。よく、あの兩腕で石が割れるものだ。よく山と取り組んで働けるものだと思ふ。

一人前の石工になるためには、早くから弟子入りをし

初等科國語七 第六學年前期用(第二分冊)

昭和二十一年四月二十四日 翻刻印刷
昭和二十一年五月二十五日 翻刻發行
昭和二十一年四月二十四日 文部省發行

初等科國語七 第六學年前期用(第二分冊)
定價 金參拾五錢

著作權所有 著作人 文 部 省

發行所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

翻刻發行 東京書籍株式會社

金印刷者 東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

發行所 東京書籍株式會社

なければならぬ。

弟子たちは、石くづをかたづけたり、仕事場の掃除をしたり、鑿などをやく火のふいごをふいたりする。かうして、三年も五年も石の山にかよつては、石工の仕事を見覚えて行くのである。大きな石が、おもしろいほど思ひ通りに割れる腕前になるには、長い間の汗みどろの努力がひそんでゐる。たとへば石を割るには、石の目を見なければならぬ。石の目といふのは、ちやうど板でいへば、木目のやうなものである。小さな雲母や、石英や、長石などが、ごちやごちやに入り混つてゐる石の面を見て、その目を見わけ、それによつてこの石はかう割れるといふことが判斷される。もし石の目を見まちがへれば、石は、とんでもない方向にひびが入り、思はない倒れ方をする。石の山で働く人は、大まかで荒つばい仕事をしておるやうで、決してさうではない。

一生を石の中で暮してゐる石工たちには、心なき岩石も意志あるかのやうに思はれ、その岩石を何百萬年もだきかへてゐる母のやうな山の心も、わかるやうな氣がするといふ。

十七 孔子と顔回

「ああ、天は予をほろぼした。天は予をほろぼした。」七十歳の孔子は、弟子顔回の死にあつて、聲をあげて泣いた。

三千人の弟子のうち、顔回ほどその師を知り、師の教へを守り、師の教へを実行することに心掛けた者はなかつた。これこそは、わが道を傳へ得るただ一人の弟子だと、孔子はかねてから深く信頼してゐた。その顔回が、年若くてなくなつたのである。

また顔回は、これほどまでその師を慕つてゐたのであつた。

三

それから數年たつて、陳・蔡の厄があつた。孔子は楚の國へ行かうとして、弟子たちとともに陳・蔡の野を旅行した。あいにくこの地方に戦亂があつて、道ははかどらず、七日七夜、孔子も弟子も、ろくろく食ふ物がなかつた。

困難に際會すると、おのづから人の心がわかるものである。弟子たちの中には、ぶつぶつ不平をもらす者があつた。き一本な子路が、とがり聲で孔子にいつた。

「いつたい、徳の修つた君子でも困られることがあるのですか。」

徳のある者なら、天が助けるはずだ。助けないところを見ると、先生はまだ君子ではないのか——子路には、ひよつとすると、さういふ考へがわたいたのかも知れない。孔子は平然として答へた。

まさに、後繼者を失つた者の悲痛な叫びでなくて何であらう。

二

十數年前にさかのぼる。孔子が、弟子たちをつれて、匡といふところを通つた時、突然軍兵に圍まれたことがある。かつて陽虎といふ者が、この地でらんばうを働いた。不幸にも、孔子の顔が陽虎に似てゐたところから、匡人は孔子を取り圍んだのである。この時、おくれればせかけつた顔回を見た孔子は、ほつとしながら、

「おお、顔回。お前は無事であつたか。死んだのではないかと心配した。」

といつた。すると顔回は、

「先生が生きていらつしやる限り、どうして私が死ねませう。」

と答へた。

孔子は五十餘歳、顔回は一青年であつた。わが身の上

「君子だつて、困る場合はある。ただ、困り方が違ふぞ。」

困つたら悪いことでも何でもするといふのが小人である。君子はそこが違ふ。」

子貢といふ弟子がいつた。

「先生の道は餘りに大き過ぎます。だから、世の中が先生を受け容れて用ひようとしません。先生は、少し手かげんをなさつたらいかがでせう。」

孔子は答へた。

「細工のうまい大工が、必ず人にはめられるときまつてはゐない。はめられないからといつて、手かげんするのが果してよい大工だらうか。君子も同じことだ。道の修つた者が、必ず人に用ひられるとはきまつてゐない。といつて手かげんをしたら、人に用ひられるためには、道はどうでもよいといふことになりはしないか。」

顔回は師を慰めるやうにいつた。

「世の中に容れられないといふことは、何でもありません。」

ん。今の亂れた世に容れられなければこそ、ほんたうに先生の大きいことがわかります。道を修めないのは君子の恥でございますが、君子を容れないのは世の中の恥でございます。」

このことは、孔子をどんなに満足させたことか。

四

孔子は、弟子に道を説くのに、弟子の才能に應じてわかる程度に教へた。

孔子の理想とする「仁」についても、ある者には「人を愛することだ。」といひ、ある者には「人のわるい口をいはないことだ。」と説き、ある者には「むづかしいことを先にするのだ。」と教へた。いづれも「仁」の一部の説明で、その行ひやすい方面を述べたのである。ところで顔回には、

「己に克つて禮に復るのが仁である。」

と教へた。あらゆる欲望にうちかつて、禮を實行せよといふのである。その實行方法として、

を聞いて十を知る男だ。」

ともいつてゐる。

孔子がよく顔回を知つてゐたやうに、顔回もまたよくその師を知つてゐた。顔回は孔子をたたへて、

「先生は、仰げば仰ぐほど高く、接すれば接するほど奥深いお方だ。大きな力で、ぐんぐんと人を引つぱつて行かれる。とても先生には追いつけないから、もうよさうと思つても、やはりついて行かないではゐられない。私が力のあらん限り修養しても、先生は、いつでも更に高いところに立つておいでになる。結局、足もともにも寄りつけないと感じながら、ついて行くのである。」

といつてゐる。顔回なればこそ、偉大な孔子の全面を、よくみとめることができたのである。

六

「先生が生きていらつしやる限り、どうして私が死ねませう。」

「非禮は見るな。非禮は聞くな。非禮はいふな。非禮に動くな。」

と教へた。朝起きるから夜寝るまで、見ること、聞くこと、いふこと、行ふこと、いつさい禮に従ひ、禮にかなへよといふのである。ここに「仁」の全體が説かれてゐる。さうして、顔回なればこそ、この最もむづかしい教へを、そのまま實行することができたのである。

五

孔子は顔回をほめて、

「顔回は、予の前で教へを受ける時、ただだまつてゐるので、何だかぼんやり者のやうに見える。しかし退いて一人である時は、師の教へについて何か自分で工夫をこらしてゐる。決してぼんやり者ではない。」

といつてゐる。また、

「ほかの弟子は、教へについていろいろ質問もし、それで予を啓發してくれることがある。しかし、顔回は質問一つせず、すぐ會得して實行にかかる。かれは、一

いつた顔回が、先生よりも先に死んでしまつた。

ある日、魯の哀公が孔子に、

「おんみの弟子のうち、最も學を好むものはだれか。」

とたづねた。孔子は、

「顔回といふ者がをりました。學を好み、過ちも二度とはしない男でございましたが、不幸にも短命でございました。」

と答へた。

十八 奈良の四季

若草山も春日野も

かすみこめたる春景色、

古き都のなごりとて

花はむかしの色に咲く。

古人いへらく、

奈良七重七堂伽藍八重櫻。

大佛殿に佛燈の

光は今もかがやきて、

正倉院は天平の

むかしを固く封じたり。

古人いへらく、

虫干しやをひの僧とふ東大寺。

鹿の鳴く音にさそはれて、

三笠の山をはなれけん、

満月はやく猿澤の

池の水の面に浮かびたり。

古人いへらく、

仲麻呂の魂祭せん今日の月。

佐保の川原は水あせて、

石にささやく音靜か。

子、海に歌である。人麻呂は、特に歌の達人といわれる。
たので、後世歌聖とたたへられた。

和歌の浦に潮みち來れば濁をなみあしべをさしてたづ

鳴きわたる

紀伊の國へ行幸の御供をした時、赤人が作つた歌である。

「和歌の浦に潮が満ちて來ると、干潟がなくなるので、

あしの生ひ茂つてゐる岸べをさして、鶴が鳴きながら飛

んで行く。」といふ意味で、ひたひたと寄せる潮の靜かな

音、鳴きながら飛んで行く鶴の羽ばたきまでが、聞かれ

るやうな感じのする歌である。

をのこやも空しかるべき萬代に語りつくべき名は立て

ずして

山上憶良の作である。憶良は、遣唐使に従つて支那へ渡

つたこともある。この歌は、「いやしくも男と生まれた以

上、萬代に傳ふべき名も立てないで、どうして空しく死

なれようか。」といふのであつて、後人を奮起させるもの

がある。

かへりみすれば葛城の

山のいただき雪白し。

古人いへらく、

大佛を見かけて遠き冬野かな。

十九 萬葉集

今を去るはば千二百年の昔、萬葉集が編纂された。

有名な歌人、柿本人麻呂や、山部赤人の作は萬葉集に

よつて傳へられてゐる。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かた

ぶきぬ

人麻呂の歌である。文武天皇がまだ皇子でいらつしやつ

たころ、大和の安騎野で狩をなさつた。人麻呂も御供に

加つた。野中の一夜は明けて、東には今あけぼのの光が

美しく輝き、ふり返つて西を見れば、残月が傾いてゐ

る。東西の美しさを一首の中によみ入れた、まことに調

りなり

東大寺の大佛ができ、インドから高僧が渡海して來たこ

ろのはなやかな奈良の都を、ありありと見るやうな氣が

する。小野老の歌である。

萬葉集には短歌が多いが、後世の歌集に比べて長歌の

多いのが、一つの特色となつてゐる。

大和には群山あれど、

とりよろふ天の香具山、

登り立ち國見をすれば、

國原はけぶり立ち立つ、

海原はかまめ立ち立つ。

うまし國ぞ、

あきつ島大和の國は。

舒明天皇の御製で、長歌としては短いものの一つであ

る。「大和の國には、たくさん山々があるが、中でもり

つばに整つた香具山に登つて、國のやうすを見ると、平

地は廣々として、かまどの煙があちらこちらに立ちのぼり、海のやうに見渡される池には、かもめがあちらこちらに飛び立つてゐる。大和は、ほんたうにりつばなよい國である。」といふのであつて、美しい光景を目の前に見るやうにお歌ひになつてゐる。

萬葉集の歌は、まことに雄大であり明朗である。それは、わが古代の人々が、雄大明朗の氣性を持ち、極めて純な感情に生きてゐたからである。「萬葉」とは「萬世」の意で、萬世までも傳へようとした古人の心を、われわれは讀むことができるのである。

二十 修行者と羅刹

色はにほへど散りぬるを、
わがよたれぞ常ならむ。

どこからか聞えて来る聲のことば。美しい聲。

を見つめた。

「まさか、この無知非道な羅刹のことばとは思へない。」と、一度は否定してみたが、

「いやいや、かれとても、昔の御佛に教へを聞かなかつたとは限らない。よし、相手は羅刹にもせよ、惡魔にもせよ、佛のみことばとあれば聞かなければならない。」

修行者はかう考へて、靜かに羅刹に問ひかけた。

「いつたいおまへは、だれに今のことばを教へられたのか。思ふに、佛のみことばであらう。それも前半分で、まだあとの半分があるに違ひない。前半分を聞いてさへ、私は喜びにたへないが、どうか残りを聞かせて、私に悟りを開かせてくれ。」

すると、羅刹はとばけたやうに、

「わしは、何も知りませんよ、行者さん。わしは腹がへつてをります。あんまりへつたので、つい、うは言が出たかも知れないが、わしには何も覺えがないのです。」と答へた。

身も心も疲れきつた一人の修行者が、ふとこのことばに耳を傾けた。

いひ知れぬ喜びが、かれの胸にわきあがつて來た。病人が良藥を得、渴者が清冷な水を得たのにもまして、大きな喜びであつた。

「今のは佛の御聲でなかつたらうか。」

と、かれは考へた。しかし、「花は咲いてもたちまち散り、人は生まれてもやがて死ぬ。無常は生ある者の免れない運命である。」といふ今のことばだけでは、まだ十分でない。もしあれが佛のみことばであれば、そのあとに何か續くことばがなくてはならない。かれには、さう思はれた。

修行者は、座を立つてあたりを見まはしたが、佛の御姿も人影もない。ただ、ふとそば近く、恐しい惡魔の姿をした羅刹のゐるのに氣がついた。

「この羅刹の聲であつたらうか。」

「私はおまへの弟子にならう。終生の弟子にならう。どうか、残りを教へていただきたい。」

羅刹は首を振つた。

「だめだ、行者さん。おまへは自分のことばかり考へて、人の腹のへつてゐることを考へてくれない。」

「いつたい、おまへは何をたべるのか。」

「びつくりしちやいけませんよ。わしのたべ物といふのはね、行者さん、人間の生肉、それから飲み物といふのが、人間の生き血さ。」

といふそばから、さも食ひしんばうらしく、羅刹は舌なめずりをした。

しかし、修行者は少しも驚かなかつた。

「よろしい。あのことばの残りを聞かう。さうしたら、

私のからだをおまへにやつてもよい。」

「えつ。たつた二文句ですよ。二文句と、行者さんのからだをとりかへつこをしてもよいといふのですか

い。」

修行者は、どこまでも真剣であつた。

「どうせ死ぬべきのからだを捨てて、永久の命を得ようといふのだ。何でこの身が惜しからう。」

かういひながら、かれはその身に着けてゐる鹿の皮を取つて、それを地上に敷いた。

「さあ、これへおすわりください。つつしんで佛のみことばを承りませう。」

羅刹は座に着いて、おもむろに口を開いた。あの恐しい形相から、どうしてこんな聲が出るかと思はれるほど美しい聲である。

「有爲の奥山今日越えて、

浅き夢見じ酔ひもせず。」

と歌ふやうにいひ終ると、

「たつたこれだけです。ね、行者さん。でも、お約束だから、そろそろごちそうになりませうかな。」といつて、さよふらりと目を光らした。

「一言半句の教へのために、この身を捨てるわれを見よ。」

と高らかにいつて、ひらりと樹上から飛んだ。

とたんに、妙なる樂の音が起つて、朗かに天上に響き渡つた。と見れば、あの恐しい羅刹は、たちまち端嚴な帝釋天の姿となつて、修行者を空中にささげ、さうしてうやうやしく地上に安置した。

もみもろの尊者、多くの天人たちが現れて、修行者の足もとにひれ伏しながら、心から禮拜した。

この修行者こそ、ただ一すちに道を求めて止まなかつた、ありし日のお釋迦様であつた。

二十一 末廣がり

大名「このあたりの大名でござる。太郎冠者あるか。」

冠者「お前に。」

修行者は、うつとりしてこのことばを聞き、それをくり返し口に唱へた。すると、

「生死を超越してしまへば、もう浅はかな夢も迷ひもない。そこにはんたうの悟りの境地がある。」

といふ深い意味が、かれにはつきりと浮かんた。心は喜びでいつぱいになつた。

この喜びをあまねく世に分つて、人間を救はなければならぬと、かれは思つた。かれは、あたりの石といはず、木の幹といはず、今のことばを書きつけた。

色にはへど散りぬるを、

わが世たれぞ常ならむ。

有爲の奥山今日越えて、

浅き夢見じ酔ひもせず。

書き終ると、かれは手近にある木に登つた。そのつべんから身を投じて、今や羅刹の餌食にならうといふのである。

ではない。明日のお客の引出物に、末廣がりを出さうと思ふ。汝は大儀ながら京へのぼり、急いで求めてまわれ。」

冠者「かしこまりました。」

大名「急げ。」

冠者「はつ。さてさて、それがしの主人は、立板に水を流すやうに、ものをいひつけられるお方ぢや。

まづ急いでまわらう。とかく申すうちに、これはもう都ぢや。や、うかと致した。それがしは末廣がり屋を存せぬが、何と致さう。や、物の欲しい時は、大聲に呼ばはるものと見える。それがしも呼ばはつてみよう。末廣がりを買はう、末廣がりを買はう。」

わる者「これは京に住まひ致すわる者でござる。何者かは知らぬが、わいわいわめいてゐる。ひとつ當つてみませう——なうなう、そなたは何をわいわい

めいてゐられるぞ。」

冠者「それがしは、田舎からまゐつた者でござる。末廣がり屋を知らぬによつて、かやう申すのでござる。」

わる者「それがしは、末廣がり屋の主人でござる。」

冠者「それは仕合はせな事。末廣がりにはござらうか。」

わる者「いかにも。」

冠者「急いで見せてくだされ。」

わる者「心得ました——はて、何を賣つてくれようか。や、よいことがある。これにからかきがあるから、これを賣つてやらう——なうなう、田舎の人、これぢや。」

冠者「や、それが末廣がりでござるか。」

わる者「いかにも。」

冠者「なるほど、廣ければ大きな末廣がりぢや。ここに御主人の書きつけがあるによつて、それに合つた

ぬ。賣りますまい。」

冠者「いや、十兩のうち、一兩ばかりも引いてくださらぬかといふのでござる。」

わる者「よろしうござる。賣つてあげませう。」

冠者「かたじけなうござる。さらば、さらば。」

わる者「なうなう、そなたは定めて主人持ちでござらう。」

冠者「いかにも。」

わる者「主人といふ者は、きげんのよいこともあり、悪いこともある。もし、きげんが悪うござつたら、かうかはやして舞はれたらよからう。」

冠者「さてさて、かたじけなうござる——まづ御主人に急いでお目かけよう。殿様、ござりますか。」

大名「太郎冠者、もどつたか。」

冠者「歸りました。」

大名「大儀であつた。急いで見せい。」

冠者「はつ。」

わる者「では、お讀みくだされ。」

冠者「まづ地紙よくとござる。」

わる者「これ、地紙とはこの紙のこと。きつねの鳴くやうに、こんこんといふほど、よく張つてござる。」

冠者「骨みがき。」

わる者「これ、骨みがきとはこの骨のこと。とくさをかけてみがいてあるによつて、すべすべ致します。」

冠者「要もとして。」

わる者「かう廣げて、この金物でじつとしめるによつて、要もとしてでござる。」

冠者「さてさて、書きつけに合つてうれしうござる。して、價はいかほどでござらうか。」

わる者「高うござるぞ。」

冠者「いくらほどでござるぞ。」

冠者「それはまた高いくちぢや。一兩ばかりになつたりと

冠者「末廣がりてござります。」

大名「これが。」

冠者「はあ。殿様の御合點まからぬも道理でござります。かう致しますと、ぐつと廣がります。」

大名「いかにも大きな末廣がりぢや。して、あの書きつけに合はせてみたか。」

冠者「合はせましたとも。お讀みくだされ。」

大名「まづ地紙よく。」

冠者「それこそ氣をつけました。これ、この通り、きつねの鳴くやうに、こんこんといふほど、よく張つてござります。」

大名「骨みがきは。」

冠者「これ、この骨でござります。とくさをかけてみがいてあるによつて、すべすべ致します。」

大名「要もとしては。」

冠者「かう廣げまして、この金物でじつとします。」

六名「やい、太郎冠者。そちは末廣がりを知らぬな。末廣がりとは、扇のことぢや。おのれは古がさを買うて来て、やれ末廣がりで候の、骨みがきで候のと申しをる。すさををらう。」

冠者「お許しくださいれ——さういはれれば、なるほどこれは古がさぢや。これは、へんなことになりをつた。おお、さうちや。あれをはやして、ごきげんをなほさう。」

えいえい、

かさをさすならば、

人がかさをさすならば、

おれもかさをささうよ。」

大名「や、おのれ、買物にはままとだまされて、申しわけに、はやしものをするとは。いやいや、あきれたやつめ。や、これはこれは。や、これはおもしろいぞ。」

げにもさうよの。

かさをさすならば、

人がかさをさすならば、

おれもかさをささうよ。

げにもさうよ、

げにもさうよの。」

昭和二十一年七月一日 翻刻印刷
昭和二十一年七月三十日 翻刻發行
(昭和二十一年七月一日 印刷者絶死)

初等科國語七 第六年印刷用(第三分冊)

◎ 定價 金三十拾錢

著作權所有 發行所 文 部 省

Approved by Ministry
of Education
(Date July 1. 1946.)

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
翻刻發行 東京書籍株式會社
代表者 井上源之丞
印刷所 東京書籍株式會社

發行所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社